



Title	特殊モーラの挿入による形容詞の強調について
Author(s)	金子, 理紗
Citation	大阪大学英米研究. 2018, 42, p. 145-155
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99424
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

特殊モーラの挿入による形容詞の強調について

金子 理紗

1 研究の背景と目的

1.1 研究の背景

日本語では、語の発音を一部引き伸ばすことで、強調を表すことがある。たとえば「やーわらかい」(柔らかい)、「あっかるい」(明るい)、「おんもしろい」(面白い) などである。引き伸ばし方はさまざまだが、語中に特殊モーラが現れる方法が広く用いられている。このような表現は臨時的・周遍的な現象と考えられたためか、これまであまり研究されてこなかった。日本語の一般的な音配列では、和語の場合には無声阻害音前への撥音の挿入が避けられ (Itô & Mester 1995)、和語・漢語・オノマトペでは有声子音前への促音の挿入が避けられる (Kubozono (ed.) 2015) が、語中に特殊モーラが現れる強調表現においても、避けられる、あるいは好まれる特殊モーラのパターンは決まっているのであろうか。

先行研究をみると、東京方言における形容詞の強調では、現れる特殊モーラは1つに限定されないと述べられている (郡 1989、松本 1998、Kawai 2011、Kaneko 2012、金子 2013)。ただ、例を数例あげて内省に基づいて論じているものや、特殊モーラの挿入位置に主眼を置いているものが多く、挿入される特殊モーラの傾向についてはほとんど明らかにされていない。一方、静岡方言における形容詞の強調では、強調で挿入されうる特殊モーラの種類が、音環境別に1種類のみ限定されることが報告されている (Davis & Ueda 2002 a, 2002 b)。語の第一音節が開音節で、第二音節頭子音が有声子音の場合は、撥音のみが現れ、たとえば「よわい」の強調形は「よんわ

い」になるという。語の第一音節が開音節で、第二音節頭子音が無声子音の場合は、促音のみが現れ、たとえば「たかい」は「たっかい」になる。そして、語の第一音節が閉音節の場合は、長音のみが現れ、たとえば「すっばい」は「すーっばい」になる。このような音環境との関連は、東京方言における形容詞の強調にもあるのであろうか。

1.2 研究の目的

そこで、本研究の目的は、東京方言の形容詞における語頭音節へのモーラ挿入による強調が、どのような音配列で容認されうるのか、その傾向を調査・分析することである。特に、容認される音配列にはどのような傾向があるのか、その音配列パターンは静岡方言における形容詞の強調にみられるものと比較してどのような特徴があるのか、また日本語の一般的な音配列制約との関連はみられるのか考察する。

2 調査方法

2.1 調査用の刺激

調査には、3～5 モーラの日本語形容詞 37 語を用いた。使用した調査語を下の(1)に示す。形容詞を調査語としたのは、特殊モーラの挿入による強調が、形容詞で広く見受けられるからである。日常的に使用されている語から、第二音節頭子音(C2)の種類ごとに3語ずつ、ただし /h/ については適当な語が足りなかったため、1語のみ用意した。「くだらない」は本来連語であるが、形容詞的に使われるため調査語に入れた。また、語頭音節が重音節の語(例:「ちいさい」「すっばい」)、第二音節頭子音が無い(母音のみの)語(例:「あおい」)は、今回は分析対象外とした。

(1) t/: きつい、きたない、おとなしい

/k/: たかい、あかるい、たくましい

/s/：おそい、やさしい、おそろしい

/h/：あほらしい

/b/：やばい、あぶない、すばらしい

/d/：ひどい、めでたい、くだらない

/g/：すごい、ながい、はげしい

/z/：うざい、まずい、めずらしい

/m/：あまい、さみしい、おもしろい

/n/：かなしい、たのしい、たのもしい

/t/：からい、うるさい、ありがたい

/j/：かゆい、つよい、くやしい

/w/：よわい、かわいい、やわらかい

各語そのままの発話と、C 2 前に長音 (R)、促音 (Q)、撥音 (N) をそれぞれ加えた発話で、調査用の音声を作成した。たとえば、「あかるい」/akarui/[akarui] は、/aRkarui/[a:karui]、/aQkarui/[ak:arui]、/aNkarui/[aŋkarui] となる。発話は東京方言話者である筆者が行ない、無響室で録音した。特殊モーラの挿入以外で強調が知覚されないよう、どの調査語もできるだけ同じ強さ、同じピッチレベル、同じ発話速度で発話した。

2.2 調査方法

23～30 歳の東京方言話者 20 名（女性 18 名、男性 2 名）を対象に、質問紙調査を行なった。回答の利便性を考え、質問紙は 3 つに分けて、挿入する特殊モーラ別に実施した。(1) の順で、元となった調査語と C 2 前に特殊モーラを挿入した音声を、続けて刺激として示し、音声の再生回数は制限しなかった。特殊モーラを加えた表現を強調と感じるかどうか、下記 (2) の 4 段階で評定してもらった。

- (2) ① 強調しているとは思えない

- ② どちらかというとは強調しているとは感じない
- ③ どちらかというとは強調していると感じる
- ④ 強調していると感じる

3 調査結果と考察

3.1 分析方法

特殊モーラの挿入による強調の傾向について、リジット分析（フライス 1973、渡部ほか 1985、石井 2007）を行なった。リジット分析では、そのままでは数値化できない順序カテゴリーを、リジットと呼ばれる尺度値に変換し、平均リジットで比較を行なうことにより、強調の容認度やその差を直観的に把握することが可能である。今回は特殊モーラ 3 種の結果を比較するために、回答が 4 段階の評定に均等に分布した場合を基準に、4 段階の評定をリジット値に変換し、各表現の平均リジットを算出した。

3.2 調査結果

結果を表 1 および図 1 に示す。今回の平均リジットの最大値は 0.87、最小値は 0.13、中央値は 0.5 となった。0.5 より数値が大きいほど強調としての容認度が高く、0.5 より小さいほど強調としての容認度が低いことを意味する。仮に、ある表現に対して回答者全員が「強調していると感じる」を選ぶと、その表現の平均リジットは、最大値である 0.87 となる。反対に、全員が「強調しているとは感じない」を選ぶと、その表現の平均リジットは、最小値である 0.13 となる。以下、第二音節頭子音の種類別に、結果をみていく。

3.2.1 無声阻害音前への挿入の場合

まず、無声破裂音 /t, k/ 前への挿入では、容認度の高さは、促音 > 長音 > *撥音（「*」はここでは、平均リジットが 0.5 を下回り、非容認の傾向であったことを表す）の順であった。全ての語において、促音挿入による強調が最も容認度が高く、その中でも「きつい」への促音挿入（/kiQtui/）は、調

表 1 均等に分布した場合を基準にした平均リジット

C2	単語	長音 (R)	促音 (Q)	撥音 (N)
t	きつい	0.57	0.87	0.23
	きたない	0.56	0.86	0.27
	おとなしい	0.43	0.70	0.29
k	たかい	0.70	0.81	0.38
	あかるい	0.50	0.81	0.36
	たくましい	0.56	0.83	0.34
s	おそい	0.65	0.87	0.29
	やさしい	0.61	0.71	0.38
	おそろしい	0.62	0.83	0.39
h	あほらしい	0.62	0.82	0.35
b	やばい	0.64	0.76	0.32
	あぶない	0.50	0.75	0.38
	すばらしい	0.60	0.78	0.66
d	ひどい	0.66	0.82	0.39
	めでたい	0.52	0.54	0.38
	くだらない	0.61	0.84	0.46
g	すごい	0.57	0.80	0.71
	ながい	0.61	0.56	0.61
	はげしい	0.33	0.55	0.52
z	うざい	0.62	0.80	0.40
	まずい	0.68	0.83	0.39
	めずらしい	0.56	0.78	0.46

C2	単語	長音 (R)	促音 (Q)	撥音 (N)
m	あまい	0.72	0.71	0.75
	さみしい	0.59	0.56	0.62
	おもしろい	0.54	0.68	0.71
n	かなしい	0.54	0.64	0.62
	たのしい	0.67	0.67	0.70
	たのもし	0.52	0.68	0.67
r	からい	0.72	0.81	0.68
	うるさい	0.76	0.67	0.60
	ありがたい	0.59	0.54	0.56
j	かゆい	0.80	0.65	0.54
	つよい	0.72	0.73	0.57
	くやしい	0.62	0.75	0.52
w	よわい	0.70	0.65	0.44
	かわいい	0.70	0.77	0.59
	やわらかい	0.78	0.60	0.66

査協力者全員が「強調していると感じる」と評定した。次いで長音の挿入も、どちらかといえば強調として認められる傾向がみられた。一方、撥音の挿入はいずれの語でも強調として容認されにくかった。

次に、無声摩擦音 /s, h/ の前への挿入では、容認度の高さは、促音>長音>*撥音の順で、無声破裂音前への挿入と同様の結果であった。促音挿入による強調が最も容認度が高く、中でも「おそい」への促音挿入 (/oQsoi/) は、調査協力者全員が「強調していると感じる」と評定した。次いで長音の挿入も、いずれの語でも強調として認められる傾向がみられた。一方で撥音の挿入は、どの語でも強調として容認されにくかった。

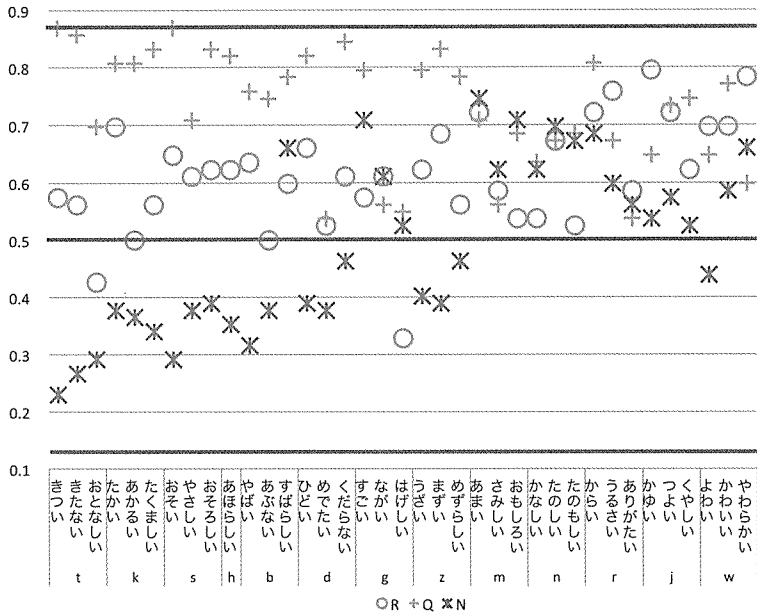


図 1 均等に分布した場合を基準にした平均リジット

まとめると、無声障害音前では、強調としての容認度は高い方から、促音挿入、長音挿入、撥音挿入で、促音の挿入は強調として最も認められやすく、長音の挿入はそれには劣るが強調としてやや認められやすく、撥音の挿入は強調として認められにくいということがわかった。無声障害音前への撥音の挿入が避けられるのは、和語における音配列にも見受けられ、特殊モーラ挿入による強調も、一般的な音配列と共通する構造をもっていると考えられる。

3.2.2 有声障害音前への挿入の場合

有声破裂音 /b, d, g/ 前への挿入では、バ行音・ダ行音前と、ガ行音前で傾向に違いがみられた。まず、バ行音・ダ行音前への挿入は、「すばらしい」以外の語では、促音>長音>撥音の容認度順であった。促音挿入の容認度が最も高く、次いで長音挿入も容認される傾向があり、撥音挿入はどの語に

においても容認されにくいようであった。「すばらしい」のみ傾向が異なっており、容認度は、促音＞撥音＞長音の順で、撥音挿入も促音挿入に続いて容認されやすく、さらには長音挿入よりも容認度が高いという結果であった。なぜ「すばらしい」のみ撥音の挿入が認められやすかったのか、先行する母音が後舌狭母音であると撥音を挿入しやすくなる可能性や、/suNbarasi:/（「すんばらしい」）という表現が半ば固定化されていて聞き覚えがあった可能性などが推測されるが、確たる要因は今回の調査からは判明しなかった。

ガ行音前では、促音の挿入が強調として認められやすく、また撥音の挿入も容認される傾向があった。これは、「すばらしい」以外でのバ行音・ガ行音前とは傾向が異なっている。長音挿入による強調は、「すごい」「ながい」ではどちらかという容認されやすく、「はげしい」では容認されにくいという結果であった。

次に、有声摩擦音 /z/（促音・撥音挿入の場合は有声破擦音 [dʒ]）前では、促音＞長音＞*撥音の順で、3語全てにおいて促音挿入の容認度が最も高く、次いで長音挿入も容認される傾向があった。撥音の挿入は、どちらかという強調として容認されにくいようであった。

まとめると、有声阻害音前では、強調としての容認度は高い方から、促音挿入、長音挿入、撥音挿入で、促音の挿入は強調として最も認められやすく、長音の挿入はそれには劣ることが多いが強調として認められやすく、撥音の挿入はガ行子音前以外では強調として認められにくい、ということがわかった。この傾向は、和語や漢語、オノマトペにおける一般的な音配列とは傾向が異なっている。和語・漢語・オノマトペでは、有声子音前への促音の挿入は避けられるが、今回の形容詞の強調では容認されやすい。反対に、和語・漢語・オノマトペでは好まれる有声子音前への撥音の挿入が、ガ行音前以外では容認されにくい。今回調査に用いた形容詞は、語種としては和語・漢語になるが、そこにかかる音配列の制約に、この点では従わないようである。撥音挿入が好まれない理由として一つ考えられるのは、バ行・ダ行・ザ行子音前に撥音が挿入された音声、東北方言などでみられる「入りわり

鼻音」のように感じられ、強調表現とは感じなかったという可能性である。調査後、協力者のうちの数人が説明してくれたところによると、これらの音声はあまり東京方言の発音には聞こえず、違う方言のように感じられたという。そのため、強調として容認されにくかった可能性が考えられる。

3.2.3 共鳴音前への挿入の場合

まず、鼻音 /m, n/ 前では、長音・促音・撥音のいずれの挿入も、強調として容認される傾向にあった。その中では、撥音・促音挿入の容認度が高めであり、長音の挿入は、「おもしろい」「かなしい」「たのもしい」では、どちらかという容認傾向ではあるが、やや容認度が下がる。

次に、はじき音 /t/ 前では、こちらも長音・促音・撥音のいずれの挿入も、強調として容認されやすいという結果であった。その中では、撥音の挿入の容認度がやや低めとなる傾向がみられた。「ありがたい」では、他 2 語と比べるとどの音の挿入も容認度が下がり、これは「ありがたい」という語があまり話し言葉的でないために、語形を破壊することが避けられて、全体的に容認度が下がったのではないかと推測される。

それから、接近音 /j, w/ 前では、「よわい」への撥音挿入を除くと、長音・促音・撥音のいずれの挿入も、強調として容認されやすいという結果であった。その中では、撥音挿入の容認度がやや低めの傾向で、長音・促音挿入のほうが、容認度が高めである。「よわい」への撥音挿入 (/joNwai/) が強調として認められにくかったのは、何か別の語句（例：4 Y）のように聞こえてしまったからかもしれない。

まとめると、全体として、長音・促音・撥音のいずれの挿入も、強調として認められやすいことがわかった。これはつまり、一般に和語・漢語・オノマトペでは避けられる、共鳴音前への促音挿入も容認されやすいということである。一般に撥音が入ると思われる鼻音前であっても、促音挿入の容認度が、撥音挿入の容認度に匹敵するくらいに高くなっていた。また、はじき音・接近音前では、一般にはより好まれるはずの撥音の挿入よりも、長音・促音の挿入による強調の容認度のほうがやや高い傾向がみられ、和語・漢語・

オノマトペにおける一般的な音配列の傾向とはやや異なっている。

3.2.4 阻害音前挿入と共鳴音前挿入の結果の比較

阻害音前挿入と共鳴音前挿入の結果を比較すると、次の二点で違いが認められる。第一に、容認度の差の大きさに違いがあり、阻害音前では、特殊モーラの種類によって容認度の差が大きいのに対し、共鳴音前では、容認度の差が小さくなっている。第二に、容認度の順位が、阻害音前でははっきりしており、だいたいが高いほうから促音・長音・撥音の挿入となっていることがひと目でわかるが、共鳴音前ではそれほどはっきりしていない。これは、共鳴音前では、同じ共鳴音である撥音の挿入の容認度がやや上がるのに対し、阻害音である促音の挿入の容認度はそれほど落ちないことと、半母音とも呼ばれる接近音前への長音、つまり長母音の挿入の容認度がやや上がるのが、要因であると考えられる。

3.2.5 音配列パターンの比較

先行研究 (Davis & Ueda 2002 a, 2002 b) にあった静岡方言における形容詞の強調と、音配列パターンを比較すると、下記の点が明らかになる。強調で挿入されうる特殊モーラの種類が、静岡方言の形容詞ではそれぞれ 1 種類のみに限定される (長音 or 促音 or 撥音) のに対し、今回調査した東京方言の形容詞では、先行研究 (郡 1989、松本 1998、Kawai 2011、Kaneko 2012、金子 2013) でもいわれていたとおり、それぞれ 1 種類から 3 種類あり、1 つに限定されない (長音 and/or 促音 and/or 撥音)。ただし、無秩序に特殊モーラが挿入されうるのではなく、和語・漢語・オノマトペにおける一般的な音配列とも一部共通、一部異なる傾向をもつ。共通しているのは、無声阻害音前への撥音挿入が避けられる点である。異なっているのは、有声子音前への促音挿入が容認されうる点である。また、鼻音以外の有声子音前への撥音挿入は、一般的な音配列の場合と異なり容認されにくい、完全に傾向が異なっているのではなく、共鳴音前では、有声阻害音前と比べると容認されやすい。

4 まとめ

本稿では、これまでほとんど研究対象とされてこなかった、特殊モーラ挿入による強調を取り上げた。東京方言の形容詞 37 語において、特殊モーラ挿入による強調がどのような音配列で容認されうるのか、23～30 歳の東京方言話者 20 名を対象に質問紙調査を行なった。元となった調査語と第二音節頭子音前に各特殊モーラを加えた音声が続けて示し、特殊モーラが加えられた表現を強調と感じるかどうか、4 段階で評定してもらった。

調査の結果、以下の点が明らかとなった。第一に、無声阻害音前では、促音挿入の容認度が最も高く、次いで長音挿入も容認されやすく、撥音挿入は容認されにくい。第二に、有声阻害音前では、促音挿入の容認度が最も高く、次いで長音挿入も容認されやすく、撥音挿入は g 音前以外では容認されにくい。第三に、共鳴音前では、長音・促音・撥音いずれの挿入も容認度が高い。第四に、強調で挿入されうる特殊モーラは、静岡方言の形容詞の場合と異なり、1 種類には限定されない。ただし、後続する子音別に一定の傾向がみられ、一般的な音配列とも一部共通、一部異なる傾向をもっている。

今回の調査結果には、第二音節頭子音の種類のほかに、調査方法や、各特殊モーラの音象徴的機能、各単語の意味等が、容認度に影響を与えている可能性が考えられる。今後の課題としては、まず調査方法を変更・改善して、疑似形容詞を用いた調査や、刺激語を文中に埋め込んでの容認度調査を実施したい。その後、品詞や話者属性による違い等に関しても検討を進め、語の発音が一部引き伸ばされる強調表現について、包括的な考察を行ないたい。

付記

本稿は、日本中部言語学会第 64 回定例研究会（於 静岡県立大学、2017 年 12 月 16 日）における口頭発表を元に執筆したものである。

謝辞

調査にご協力いただいた皆様に、心より御礼申し上げます。

引用文献

- Davis, Stuart; and Ueda, Isao. (2002 a) Mora augmentation processes in Shizuoka Japanese. *Japanese/Korean Linguistics* 10, Center for the Study of Language and Information, Stanford University.
- Davis, Stuart; and Ueda, Isao. (2002 b) Mora augmentation processes in Japanese. *Journal of Japanese Linguistics* 18, 1-23.
- 石井正彦 (2007) 「探索的データ解析による日本語研究法の開発」平成 15 年度～平成 17 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (c)) 研究成果報告書 (課題番号: 15520289)。
- Itô, Junko & Armin Mester. (1995) Japanese Phonology. In Goldsmith, John (ed.) *The Handbook of Phonological Theory*. Blackwell. 817-838.
- J. L. フライス (1973) (佐久間昭訳 1975) 『計数データの統計学－医学・疫学を中心に－』東京大学出版会。
- Kaneko, Risa (2012) *On the Phonology of Intensification in Japanese*. MA dissertation, University of York.
- 金子理紗 (2013) 「イ形容詞の強調における特殊モーラの挿入位置」『音声言語の研究 7』(大阪大学大学院言語文化研究科)、29-34。
- 郡史郎 (1989) 「強調とイントネーション」『講座日本語と日本語教育 (2)－日本語の音声と音韻 (上)』明治書院。316-342。
- Kubozono, Haruo (ed.) (2015) *Handbook of Japanese Phonetics and Phonology*. De Gruyter Mouton.
- 松本恵美子 (1998) 「強調表現の位置と効果についての覚書－現代日本語の形容詞の場合－」『言語科学論集』4, 55-68。
- 渡部洋・鈴木規夫・山田文康・大塚雄作 (1985) 『探索的データ解析入門－データの構造を探る－』朝倉書店。